

古典に読みとる北摂の自然と文化

2014年11月2日（日） 国崎クリーンセンタゆめほたる



講師 影山 尚之

萬葉学者／武庫川女子大学教授

今日は「古典に読みとる北摂の自然と文化」というテーマで、北摂のお話をいたします。私は豊中で生まれ、西宮の大学を出て阪神間に住み、十七年程前から川西住まいと、ほとんど北摂を出たことがございません。今日は自分の地元のお話をさせていただくような具合です。

津守氏文『住吉大社神代記』に見える古代の北摂

『住吉大社神代記』とは

資料の1頁に『住吉大社神代記』を引いています。住吉大社には津守家という代々神職を勤める家がありました。「津守」は「津を守る」の意。摂津の国は、港を管理することが決まっていた。さらに、その港を守護する役割の家柄として津守氏が存在しました。

現在は違いますが、奈良時代から明治に至るまで、津守家が住吉大社を継いできました。今話題の出雲国造家の千家氏と同じような由来の家柄です。

平安時代初期には、国の歴史書『日本書紀』とは別に「氏文」という、家の伝承や歴史を綴った書物がたくさん作られました。忌部氏の『古語拾遺』や『高橋氏文』などが競って作られる中『住吉大社神代記』という津守家の氏文も作られました。津守麻呂人、島麻呂という住吉大社の神官が、解文の体裁で住吉大社の由来を説いたものです。延暦八年の摂津職の判が押されていますので、これを信じれば七八九年。平安時代のごく初期の書物ですが、まず、ここに現れる北摂を見て行きます。

豊島郡城辺山

『住吉大社神代記』に能勢、川西、池田、豊中あたりが出てきます。冒頭は、豊島郡の城辺山。城辺山の四至（東西南北の境界線）について、

「東は能勢国の公田を限る。南は我孫^{あびこ}並びに公田を限る。西は為奈河・公田を限る。北は河辺郡の公田を限る」

―この四至の地名はよく分からない所があります。我孫^{あびこ}は住吉区の我孫子だと遠過ぎますし、公田がどこに当たるかはつきりしません。

しかし城辺山と言うのは、後文にも「為奈山」とあり、五月山の細河のあたりを城辺山と呼んでいたようです。

杣山^{そま}河も、後文から猪名川であることがわかります。なぜ杣山かというのと、猪名川の上流に杣があつたからです。木を伐つて、木材を流して、船や建物の建造に利用する、そういう杣が上流にあるので、猪名川のことを杣山河と言ったようです。

猪名川の土着の勢力を住吉の神が制す

その後、伝承めいた、神話のような話になっていきます。神功皇后が木材を利用することにした杣山河、

「元より、偽賊の土蛛、斯の山の上に城・壘を作り居住ひて、人民を略盗めき。軍大神、悉く誅伏はしめ、吾が杣地と領掌り賜ふ」。

―もともとはここには偽賊が住んでいた。事実と考える必要はないのですが、王権に服従せず、独自の暮らしを維持している土着の集団があつたというのでしょうか。謡曲などもそうですが、土蛛など、手足が長いイメージされるのも、服従しない奴らは何かおかしな連中という、若干の蔑視が垣間見えます。それが五月山あたりに城をつくつたり壘をつくつたりして、人々の物を略奪するような悪さをしていた。

その偽賊を、軍大神、すなわち住吉の大神、住之江の大神がやつつけた。土蛛をやつつけて、そして今からは、ここは私の杣どころ、我が領地にするのだというふうにおつしやつた。それ以来住吉大社の神領になつた

…というのは、あくまでも住吉大社の主張ですが。

「山の南に広大野在り。意保呂野と号く。」

―意保呂野の地名は残っていませんが、山の南に広い野があるという現在の池田市域のあたりでしょうか。川西が含まれてもいいと思います。一説には池田の宇保町。宇保と意保、音が少し似ているので、宇保町あたりとも言われます。

「山の北に別に長尾山在り。山の岑長く遠し。長尾と号く。山の中に澗水有り。塩川と名づく。河の中に塩泉を湧き出だせり」

―温泉があることがうかがえます。塩川は、現在の久安寺川とも言われます。あくまでも前後の地理関係からの想定です。

五月山から亀岡方面に行くと、止々呂美Ⅱ箕面に着きますが、あの中りの峰を長尾山と呼んだようです。現在は宝塚の方を長尾山と言いますが、そこだと少し地理が合わない。

温泉は結構ありますね。塩と言うから、少し鉄分を含んだような温泉が湧く、と書き留めてあります。

「豊島郡と能勢国との中間に斯の山在り。城辺山と号くる由は、土蛛が城・壘の界に在るに因れり。山の中に直道有り。天皇、丹波国に行幸して、還り上りたまふ道なり。頗ける郊原在り。百姓開耕りて田田邑と号く」

―と続きます。田田^{たむら}邑は多田でしょう。

多田の城辺山の中に直道があるという。この道を特定することはできませんが、神功皇后の時代の天皇、中哀天皇が、丹波の国に行つて帰つてきた道だという。丹波に抜ける道は、現在は亀岡に向かう国道四二三号線です。それに相当するような道があつたのでしょうか。

正確に書いているとも限らないので、ぼんやりと理解するしかありません。

せんが、まず、城辺山があり、住吉大社の領地だと言う。続いて、河辺郡の為奈山道。今の河辺郡。先程は、五月山で豊島郡寄りでしたが、もう少し西側、川西寄りでしょうか。坂根山、為奈山のことを別名坂根山と書いてあります。川西に栄根という地名があります。今は山であることが認識できませんが、川西能勢口からバイパスを上がって行く、あちら側が坂根山ということになるでしょうか。

河辺郡為奈山の比定

次に、やはり四至。

「東は為奈川并せて公田を限る。南は公田を限る。西は御子代国の堺の山を限る。北は公田并せて羽束国の堺を限る」

―御子代国みこしろというのはよく分かりませんが、後文には向こうの国、武庫の国であるというから西宮でしょう。

羽束はつか。千刈の池の方に、羽束川が流れる羽束山という五百メートルほどの山があります。銀山のあたりを越えて、千刈へ向かっていく所が意識されているわけです。

「杣山河を領掌る由は、上の解に同じ。但し、河辺・豊島両郡の内の山は、惣て為奈山と号く。〔別名は板根山なり〕」

―さつきは城辺山と言ひ、ここでは坂根山という。ここでは河辺郡と豊島郡の中にある山は、全部為奈山という、こういういいかげんな、ざつくりとした言い方をするあたりが古代的です。

「昔、大神、土蛛を誅ひて坂の上に宿り寝したまひき。」

―やはり土蛛をやっつけます。それから坂の上で寝たので「坂寝山と号く。」―こんなのはもちろん嘘です。地名の由来は、だいたい神様の振る舞いでこじつけられます。

地名由来 『風土記』の伝承

古代の文献の中では、『風土記』がこうした地名の由来を好んで書きます。摂津の国の風土記は、逸文が伝わるだけで全文は残っていません。ごく一部しか残っていないので全体像はわかりませんが、こういう話が摂津の国の風土記にあつても不思議ではない。つまり『住吉大社神代記』は、『摂津国風土記』という失われた風土記と非常に関係の深い文献であつたと思われれます。

「山の中に宇祢野有り。」

―川西の畝野です。能勢電鉄でも畦野駅を越えて妙見方面へ行くと急に寒くなりますね。

「天皇、采女を遣して、柏葉を採らしめたまふ。因りて、采女山と号く。(今宇祢野と謂ふは、訛よこなまれり。)」

―「采女」は若く美しい女官のことです。中哀天皇が采女を使いにより、柏の葉を取らせたから采女の王が宇祢野になったんだと言う。…やはりこじつけです。

「御子代国。(今武庫国と謂ふは、訛よこなまれり。)」

―この文献では御子代国は武庫の国の古称。次には、「為奈河、木津川」が出てきます。木津川は、猪名川の木津というところがあるように、猪名川のことを指します。

「右、河等を領掌る縁は、上の解に同じ。但し、源流は、有馬郡能勢国の北方の深山の中より出づる東西の両つの河なり。東の川は、久佐佐川と名づく。流れ通ひて多に山中を抜く。西の川は、美度奴川と名づく。美奴売の山中を流れ通ふ。」

―美度奴は後でも出てきます。三草山は五百六十メートルぐらいの山で、

棚田が非常に美しいところ。あの山を古くは美度奴山と呼んでいました。

「両の河、俱に南に流れて宇祢野に逮び」

—また宇祢野です。

「西南に同じく流れて合ふ。為奈河と名号く。」

—猪名川に流れ込む川がたくさんあると言う。

「西辺に小野有り。城辺山の西方に当る。名を軍野と曰ふ。」

—軍野の地名も残っていませんが、一説には、川西能勢口の山に向かった、古墳もある「火打」あたりではないかと言われています。火を打つという名も戦と関係がありそうに思えます。

山直阿、山部氏との関連

「昔、大神、軍衆を率て土蛛を撃たむとして、御坐しし地なり。因りて、伊久佐野と号く。河辺に、昔、山直阿我奈賀^{やまのあたいがなが}居りき。因りて、阿我奈賀川と号く。」

—山直阿一族がここに住んでいたという。山部赤人という有名な歌人も属する山部氏に關係がある「山直阿」という山林を管理する一族、材木や茸を管理して、王権に供給する役割の一族がここにいたと言うのです。『住吉大社神代記』にしか記録がないけれど、信用すれば注目すべき記述です。我奈賀がいたから我奈賀川と名づく。

「今為奈川と謂ふは、訛れり」

—これも事実ではありません。

住吉大神を巡る女神の喧嘩

「大神、靈しき男神人と現れ賜ひて、宮城を造作る料の材木を流運さしめて、行事をし賜ふ。時に、斯の川に居す女神、妻に成らむと欲ふ。亦、

西方近くに在る武庫川に居す女神も亦、同じき思を欲す。両の女神、寵愛之情を成す。而して、為奈川の女、嫡妻之心を懷きて嫉妬を発し、大石を取りて武庫川の妾神に擲打ち、并せて其の川の芹草を引取る。故、為奈川には大石無くして芹草生へ、武庫川には大石有りて芹草無し。両つの河一つに流れ合ひて海に注ぐ。神威に依りて、為奈川は今に不淨物を入れず。木津川等を領掌るは、此の縁なり。」

—というふうには、後半は少し下流域の話になってしまいましたが、これは有名な話です。

住吉大社の住吉の大神はとても男前で、為奈川の女神と武庫川の女神が「住吉の大神の奥さんになりたい」と争います。為奈川の女神は、武庫川の女神のほうに石を投げる、そして髪の毛を引っ張るように、武庫川の草を全部引っかく、だから武庫川には、今、大石があつて、為奈川にはない、かわりに為奈川には草が生えている、そんなことが書かれているわけですけども、ちよつと愉快な話ですね。

このようにして、川西、池田、豊中の一部を含めて、住吉大社の神境で、住吉大社の力の及ぶところであつたというふうな主張がなされるわけです。

古地図に見る住吉との関連

資料2頁目に地図があります。ここが一番下に住吉郡があります。奈良時代にスミノエと言っていたのが、平安になるとスミノシに変わりますが、その住吉があり、真北に豊島、能勢、あるいは川辺が位置するという、当たり前のことを確認しますと、住吉とこの地域が非常に深くかわるといふのはよく理解されます。また、摂津の国という港を展開している住吉に比べ、山側の豊島、能勢が、土蛛の居住地と認識されるの

ももつともと思えてきます。事実性は別として、なるほどそうイメージされるであろう、ということです。

『和名抄』に見る北摂

『和名抄』とは

2頁に『和名抄』という文献を引きました。正式名称は『和名類聚抄』ですが、略して『和名抄』と言います。平安時代の辞書ですが、いろんなことが載っているので百科事典と思っただけといいかもしれませぬ。源順という人がつくったもので、地名も載っています。

平安初期の津の国の郡

『和名抄』には、津の国の地名として順番に、住吉、百濟、東生、西生、島上、島下、豊島、河邊、武庫、兔原、八部、有馬、能勢と、合計十三の郡が書き留められています。平安時代初期には、摂津の国には十三の郡があつた。圏点を付けたのが、いわゆる北摂、北の摂津ということになるでしょうか。

本来、有馬郡は兵庫県域ですので、北摂には入れにくいのですが、最近有馬のあたりが盛んに北摂を主張して、北摂三田高校という学校まであります。豊中、池田に生まれ育った私どもにしたら違和感があるのですが、地元でそう言われているので、仲間に入れておきました。

島上は、今の高槻、茨木のあたりでしょう。島の下が茨木、島上は高槻でしょうか。

豊島は豊中、池田ですし、河邊は言うまでもありません。能勢はその北ですから、川西や猪名川町・能勢町です。

能勢郡の三郷 比定地

2頁の【2】に『和名抄』巻六から古代の能勢郡のことを引いています。能勢郡の下に郷があります。「郷」は今の村、町に当たる単位です。能勢郡には、能勢郷、雄村郷、枳根郷と3つの郷があつた。それぞれの郷が現在のどこに当たるかという比定地を書いていますが、これは怪しいと思ってください。そんな昔の郷域の国境界線は残っていませんから、いろんな現在に残る地名などから推定しています。

能勢郷は、能勢郡の中心地なので、現在の野間のあたり、野間の大櫨とか、あの辺が能勢郷だと考えられています。倉垣もそうです。

雄村郷は吉川ですから、妙見山のあたりになりましょうか。枳根は、『延喜式神名帳』に能勢郡「岐尼神社」とあり、今も森上に岐尼神社という神社が残っていることから、森上のあたりが枳根郷でしょう。

『延喜式』に見える三座

『延喜式神名帳』は平安時代の書物で、儀式書ですが、そこには日本各地の神社が登録されています。

能勢郡の神社は、岐尼神社、久佐々神社、野間神社の三社です。この三社は平安時代の初めに既にあつた。今の場所に平安時代から存在した保証はありませんが、しかしこの三つの神社は現在もそれぞれ残っているのので、古社だということになります。中でも、能勢宿野の久佐々神社は、なかなか古式ゆかしき神社です。

『続日本紀』巻五・巻六より

久佐佐郷の分立

同じく2頁に、『続日本紀』の和銅六年の記事を挙げています。和銅

六年、七一三年、今から一三〇〇年前の記録です。

「己卯、撰津職言さく」

―撰津職は、撰津を治める役人です。

「河辺郡玖佐佐村は、山川遠隔にして、道路險難なり。」

―北撰の人間にとつては不名誉な記述ですが、山川が遠い、遠く山川を越えていかないといけない、道路は非常に険しい。

「是に由りて、大宝元年、始めて館舎を建て、雑務公文、一ら郡の例に准へたり。」

―河辺郡の玖佐佐村のあたりは非常に遠く、撰津職が管理するには不便なので、大宝元年、七〇一年に役所を建てて、そこで自分の仕事を取り扱うようにして、郡と同列の扱いにしてきた。七〇一年以来、そこは河辺郡の中なんだけれども、独立の郡のように扱ってきた、だから

「請ふ、郡司を置かむことを」

―玖佐佐村に郡司を置いてくださいと、撰津職は国に訴えています。郡を分けてほしい、国はそれを許しました。それで能勢郡は河辺郡から独立して、七一三年に立てられたというわけです。

さきほどの地図で見ても、能勢郡が河辺郡に吸収されているとすると、非常に大きな郡になってしまいます。尼崎からこのあたりまでを全部統括するのは非現実的でした。その十二年前、七〇一年から郡相当の機能を果たしていたという、能勢の歴史は非常に古いですね。

『日本書紀』雄略天皇の記事

土師氏から菅原氏へ

日本書紀の雄略天皇の記事。雄略天皇十七年ですから、五世紀の半ばごろ。十七年春三月の丁丑の朔戊寅に、土師連、土師氏というのは、平

安時代になると菅原氏になります、菅原道真の一族です。この一族はもととは埴輪や、土師器という、素焼きの土器のようなものをつくっていました。その素焼きの土器とか埴輪は何に使うかというと、主に古墳の中に埋納します。埴輪は亡くなった方の周りを飾るもの、土器の類も死者に供える食べ物とか飲み物を盛る器、もちろんそれ以外の用途もあるのですけれども、土師氏というと葬礼関係、凶礼関係の家でした。そのうちに土師氏出身の政治家や外交官も出てきて、平安時代になると、いつまでもそんな土師器とか埴輪のイメージの名前では嫌だと言って、菅原になったんです。北撰とは別の話ですが。

土・水・炭に恵まれた玖佐佐地域

「土師連等に詔して、朝夕の御膳盛るべき清器つくる者を進らしめたまふ。」

―雄略天皇が、朝晩の御飯を盛る立派な器が欲しい、ついでにはそれをつくる技術者を献上せよと、土師氏に対して命じるわけです。そこで土師連の親、吾筈という人が

「よりて撰津国の来狭狭村、山背国の内村・俯見村、伊勢国の藤形村と丹波・但馬・因幡の私の民部を進る。名けて贄土師部と曰ふ。」

―という。贄は、天皇に差し上げる食べ物という意味で、天皇のお食事を盛る器をつくる集団として、贄土師部をつくり、その贄土師部を丹波、但馬、因幡からも献上したんだけれども、筆頭に出てくるのが玖佐佐村、さつきの久佐々神社の安楽寺、玖佐佐村です。

二番目に山背の内村と書いてありますのが現在の宇治です。俯見は伏見です、伏見稲荷のあたりですね。

宇治とか伏見とか、あるいは伊勢からも贄土師部が献上されますが、

その筆頭に撰津の国の玖佐佐村が挙がっています。

伏見と言えば、伏見人形。その伏見人形が土師器の末流です。埴輪が形を変えて伏見人形になった。奈良には長谷寺に向かう途中に出雲村というところがあつて、出雲人形というのをつくっています。伏見人形より少し素朴な感じのする人形ですが、それも埴輪の名残です。

その土師氏がつくっていた土製品の文化を玖佐佐村は古代に保有していたこととなります。要するに土をこねる技術、窯で焼く技術ということになりますが、良質の土を産する。また、火を焚くために炭を産するということが必要になってきます。水も要ります。そういう自然環境、良質の土、炭、水という自然環境に加えて土器製作の技術をこの地域で伝えていたということが推測されます。

『撰津の国の風土記』

能勢の美奴女と神戸岩屋との関係

2頁の終わりに挙げているのが、ごく一部残っている『撰津国風土記』です。『津の国の風土記』と、『撰津の国の風土記』の伝承が、さまざまな文献に引用されて断片的に残っており、そのうちの一つが能勢に関係しています。それが美奴売。美奴売の松原と冒頭に出ています。能勢に松原はありません。松の木はあるでしょうけど、松原というのは海岸線になるので、松原とあるのは能勢ではありません。

「今、美奴売と称ふは神の名なり。」

—美奴売と言うのは神の名前だと言う。美奴売、分解すると「水」の「女」。水の女で美奴売というわけで、女神様だったことが推測されます。

「美奴売と称ふは神の名なり。その神、もと、能勢の郡の美奴売の山

に居たまひき」

—前出の三草山の水の女神が美奴売であったようです。つまり猪名川の女神です。

「昔、おきながたらしひめ息長帯比売の天皇。」

—瀬戸内海沿岸にこの神功皇后の伝承が分布します。例えば西宮の廣田神社、また、長田神社とか生田神社とか、海岸線に神功皇后伝承が伝わっています。これもその一環ですが、神功皇后伝承が山の中に存在するという意味では、これは非常に珍しいものと言えます。

「その帯比売の天皇、築紫の国に幸しし時、諸の神祇、川辺の郡なる神前の松原に集ひけり。」

—九州に出かけて行くときに、川辺郡の神前の松原にいろんな神様が集まってきた。神功皇后は九州が目的地ではなくて、新羅に向かっていきます。今出向に当たって神前に集う、現在の神崎川の河口のあたりですから尼崎です。

「以ちて礼福を求ぎたまふ。」

—無事を祈る祭りごとをしたのでしよう。

「時に、この神も同に來て集ひけり」

—尼崎まで三草山の神様が、神功皇后の見送りに行つた。

「曰はく、「吾も護り佑けまつらむ」

—私も神功皇后のお役に立ちたいと、神様がおっしゃつた。

「仍ち諭へて曰はく、『吾が住める山に、須義乃木あり。宜なへ伐り採りて、吾をして船を造らしめたまひ、則ちこの船に乗りて行幸すべし。当に幸福あらむ』といひけり。」

—私の住んでる山に杉の木があります。この木を好きだけ伐つて、それで船をつくりなさい。自分の住んでる山の木は、私そのものですから、

私があなたの船になりましょう。その船に乗って出かけたなら、無事に目的を達成できますよ、と三草山の神様、美奴売が言われた。

「天皇、乃ち神の教の隨に命をして船を作らしむ。この神の船、遂に新羅を征ちけり。」

―神功皇后が神様の言われたとおりにしたら、見事に新羅を討つて帰ってくる事ができた。

「還り来たまふ時、この神をこの浦に祠祭り、并せて船をも留みおきて以ちて神に献りけり。またこの地を名けて美奴売と曰ひけるとそいふ。」

―無事に征討果たして帰ってきたけれど、能勢まで帰らず、神崎までも帰らないで、今の美奴売に神様を祭ることにしたと言う。現在の美奴売は、神戸市灘区の岩屋。阪神電車の岩屋の駅から十分ほどのところに敏馬^{みぬめ}神社があります。敏馬神社の石段を降りたところが砂浜、海でした。海に面して敏馬神社があるのは、境内の古い写真を見るとよくわかります。江戸時代の「摂津名所図会」も境内に展示していますが、浜に面したところに神社があつて、ああ港だったんだな、神功皇后が新羅から帰ってきたときここに寄つて船を奉納して神を祭つたという話はうなずけます。敏馬は『万葉集』の歌などにも盛んに出てきます。能勢の水の神様が神戸に居を移したという話です。

猪名川上流と神崎とのつながり

『住吉大社神代記』に杣山河とありましたが、猪名川の上流域が木材の供給地としてあつた。木材を伐採する人々が森林を管理して、必要に応じて木材を伐り、猪名川に流す。流していくと、それが河辺郡の南、現在の伊丹、尼崎に至ります。尼崎の神崎というあたりが古代の造船場

です。造船の技術者を猪名部と言います。古代の木材加工をする技術者が猪名川の下流に住み、能勢の木材を使って舟をつくる、その文化と敏馬という港湾の文化とがダイレクトにつながっているわけです。

木材供給地、加工地、そして港湾。現在も密接な関係を持つその三つが非常に深くかかわりを持って、そしてその全てが、住吉大社の管理するところである、神功皇后が出てまいりますから、住吉大社の影響下にあるということ、風土記の記事は伝えます。一種の文化圏が、このお話の背後に広がっています。

豊島郡の『万葉集』

『和名抄』豊島郡七郷の比定地

資料3頁【3】の豊島郡の万葉集の話です。現在の豊中地域に曾根駅があり、駅前に豊島公園という大きな公園があつたり、箕面との境に豊島高校という高校もありますね。池田市にも北豊島中学校とか小学校があります。豊島は、トヨシマ、トシマ、関西ではテシマとよみます。

『和名抄』を見ると、豊島郡には秦上、秦下、駅家、豊島、余部、桑津、大明、七つの郷が存在していた。これは歴史的に揺れがありますが、一応、最大七つ。それぞれの現在の比定地を挙げました。

秦の上は池田の細河のあたりです。秦の下、現在、秦という地名があります。五月山の麓、秦野池田地区、東秦野、そんな地名があります。

駅家、これは箕面に求めざるを得ません。山陽道、摂津の国、草野の駅家が萱野三平で有名な西国街道の萱野でしょうから、駅家郡駅家郷は箕面市になります。

豊島郷が池田の石橋、井口堂、豊中の方に入つていったところでしょう。

余部、豊中の走井、原田、岡町の辺りです。

桑津は現在、猪名川の少し南に下った伊丹の桑津という地名があり、桑津橋という橋があります

大明郷は豊中の南部と考えられます。今、岡町のあたりに大池という地名があつて、大池が大明かと思つたりもします。そんな程度で、あまりどこで線を引くかはつきりわかりません。

『延喜式』に見る豊島郡の五座

『延喜式』の神名帳を見ると、豊島郡には五つの神社があつて、為那都比古神社、これが二座、細川神社、垂水神社、阿比太神社とあります。為那都比古神社は、今はあちこちにありますが、一番信憑性があるのは、箕面の山手のあたりにある為那都比古神社でしょうか。

『万葉集』の五月山・佐伯山

3頁の後半。豊島郡の『万葉集』です。豊島郡の歌は、結論としてどれも不確実なのですが、とりあえず池田というと五月山を思い浮かべます。五月山動物園のある、あの五月山を詠んだのかな、という歌があります。

五月山 宇能花月夜 霍公鳥 雖聞不飽 又鳴鴨

五月山卯の花月夜ほととぎす聞けども飽かずまた鳴かぬかも

という、この歌が万葉集の巻十に出ます。

五月山の卯の花が美しく咲いている月の晩にほととぎすが鳴く、ああいいな、もつと鳴いてくれないかなという歌です。それと似たところのある歌

佐伯山 干花以之 哀我 手駕取而者 花散軈

佐伯山卯の花持ちしかなしきが手をし取りてば花は散るとも

こちらは少しくだけた感じの歌です。佐伯山の卯の花を手持っていた可愛い女の子の手を握れるのなら花など散つてもよい。花より団子でなく、花より女子というふうな歌です。

『大日本地名辞書』の五月山・佐伯山

吉田東伍という、明治時代の地理学者が書いた『大日本地名辞書』という書物の、豊能郡五月山の項目、

「池田町の上方、抜海凡二百米突、秦野山の西嶺なり、蓋佐伯山の訛とす。日本書紀仁徳天皇の時猪名縣佐伯部移于安藝とあるその佐伯部の遺墟なるべし」

—古く猪名縣＝猪名川流域に佐伯部という一団が住んでいた。『日本書紀』の記事は佐伯部を安藝の国＝広島に移したというけれども、猪名流域に佐伯部が住んでいたことは間違いなく、現在の五月山は、この佐伯山がなまったものに違いない、そういう次第で、佐伯山卯の花も散るこの山は、池田の五月山で、なまった五月山のほうも池田だと『大日本地名辞書』は考えます。

けれども、池田の佐伯山を五月山と呼んだ古代中世の記録はありません。前出の『住吉大社神代記』では城辺山とか為奈山と呼んでいて、五月山と称した形跡はありません。『大日本地名辞書』は、サエキからサツキと音を変えたといいますが、これは言語学的に不可能で、サエキはサツキには変わりません。そのような次第で、今のところ、この二首が池田の山を歌つたとは決められないのです。

『古今和歌集』の五月山

『古今和歌集』に

五月山こずゑを高みほととぎす鳴くねそらなる恋もするかな

という歌があります。五月山というのは、和歌では、五月の、夏の美しい山という一般名詞に用いられます。先ほどの万葉集の歌にも卯の花が出てきます。四月から五月に咲く卯の花が全山を彩ると、ああ五月の山だなというふうには、それが池田でも川西でも構わないのですが、強引に持つてくるわけにはいかないのです。

『万葉集』の垂水

4頁目に垂水が出てきます。志貴皇子という、万葉集の中ではよく知られた風流な歌人で、天智天皇の息子ですが、「志貴皇子の懼よそこびの御歌」が残っています。

石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨

石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも

垂水というのは滝で、上から下に水が落下する状態です。そのように歌の意味が上から下にずつと流れてきて、よどみのない良い歌です。石走る垂水のほとりのさわらびが萌え出す春になつたなあ、と第一句から第五句に流れていきます。掛詞などが入って、途中まで読んで前に戻るような歌もありますが、この歌はとても爽やかに流れています。

「石走る」は枕詞のようなものとお考えください。岩がそそり立って、その間を水が流れる。現代は滝と言いますが、古代では垂水と言います。古代語タキは激流を意味し、上方から下方に流れる水は垂水と言います。その意味ではこれも一般名詞、普通名詞ですが、垂水という地名もあります。神戸の垂水、吹田に垂水町というところもあります。

『新撰姓氏録』の垂水

志貴皇子の歌の左側に、垂水公と呼ばれる人物を書き留めた『新撰姓氏録』という書物を引きました。

「豊城入彦命の四世孫、賀表乃真稚命の後なり。」―その六世孫、阿利真公というのが出てきます。今の有馬と関係がありそうです。

「阿利真公、謚孝徳天皇の御世に」

―孝徳天皇、難波に都を置かれた方、阿利真公のお父さんです。

「孝徳天皇の御世に、天下旱魃し、河井涸れ絶えぬ」

―川も井戸も涸れてしまった。

「時に阿利真公、高樋を造作り、垂水の岡基の水を以ちて宮内に通はしめ、御膳に供奉りき。」

―垂水の岡から難波の宮まで樋をつくって、難波の宮に水を引っ張つてきて天皇に差し上げた。

「天皇、其の功を美しみたまひ、垂水公の姓を賜はしめ、垂水神社を掌らしめたまひき」

―孝徳天皇がよくやったぞと、阿利真公に垂水公という名前を与え、垂水神社を管理せよということになった。この垂水、神戸の垂水から難波の宮までだと遠すぎます。吹田の垂水です。阪急電車の千里線、豊津駅から歩いて十分程のところには、垂水町という町があり、住宅街の中に垂水神社があります。

4頁に写真を挙げていますが、今の垂水神社の本殿、拜殿、境内の中に入りっぱなし垂水があります。ちよつとした行場のような感じですよ。

下に挙げた地図には千里丘陵に箕面川という川が流れています。神崎川も流れていますけども、難波の宮から北に上がると吹田の垂水であることがわかります。『新撰姓氏録』の記事は、この垂水神社を管理する

垂水公という一族が、難波の宮のときに、朝廷に水を献じたという、そういう記事です。ここがよい水を産するということなのでしょう。

古代大阪の地形

古代の大阪は、海が生駒の麓あたりまで入り込んでいました。本当に大昔は生駒の麓までが海でした。川の水が運ぶ土砂などで、何百年、何千年の間に陸地が伸びて行きます。難波の宮から北に伸びている天満砂州の域の北側の陸地が、千里丘陵などがある北摂の丘陵地にくっついていきます。完全にくっついたら、東側の土地が汽水湖になり、やがてこれが陸地化するわけです。完全に陸地化するのはずっと後です。潮の干満などで、海水が東のほうに流れ込むということもしばしばあった地域です。

現在でも大阪に行くと、上本町が高い。あべのハルカスから東西を見たら低い。それは谷町です。上町が地図の半島状になっているところで、その東西は谷町。

梅田も土を埋めたから梅田と言います。そういう形状ですから、水が出ない。良質の水は、北の陸地を流れる河川から供給するしかありません。垂水神社は『延喜式』に登録される古社ですが、大阪に水を供給する重要な土地であったことが知られます。

『万葉集』の「垂水」 通説

先ほどの志貴皇子の歌の垂水が、垂水神社を歌ったものかどうかはわかりません。よろこびの歌と書いてあるだけで、志貴皇子が垂水神社に行く必然性もないし、かと言って行かなかったという確証もありません。志貴皇子の歌の「垂水」は、普通名詞と解するのが通説とされています。

『万葉集』 摂津の歌

『万葉集』巻七には「摂津にして作る」と題された歌がずらつと並びます。その冒頭から三首、ここに挙げました。冒頭は、

しなが鳥 猪名野を来れば 有間山 夕霧立ちぬ 宿りはなくて

というよく知られた歌です。猪名野にくると、有間山に夕霧が立ち込めてきた。まだ今晩宿るところも決まっていけないのに、という。有間山ここでは六甲山を指すと考えられます。その次の歌、

武庫川の水脈を早みか 赤駒の 足掻く激ちに 濡れにけるかも

と武庫川が詠われています。猪名野、武庫川、六甲山も詠われています。摂津の国の地名が展開し、三首目、

命を 幸く良けむと 石走る 垂水の水を むすびて飲みつ

長生きできますようにと願い、石走る垂水の水を手ですくって飲んだという。摂津の垂水神社の滝かどうかはわかりませんが、摂津の国の歌として並べている以上、この歌に地名を探せば、垂水しかありません。この歌の作者の意図はわかりませんが、『万葉集』巻七を編集した人は、垂水を地名と扱っています。長寿の祈りを込めていますので、ただの水、ただの滝ではない。御神水と言いますように、非常に効き目のある水と意味づけをしていますから、地名と考えたのでしょうか。

というわけで、これが摂津の垂水であれば、志貴皇子の垂水も、垂水神社の滝を歌ったとしてもおかしくはない。

豊嶋の采女

写真の左に、豊島郡の三つ目、豊嶋の采女が出てきます。◆豊嶋の采女の恋と死 のところ。先程、「宇都野の地名の由来は采女」とい

うのがありましたので、そこからの連想でこれを引きました。

天平十年、七三八年の秋八月に、右大臣橘家にして宴する歌というのが『万葉集』巻六に出てきます。資料に挙げた四首の三首目、

もししきの 大宮人は 今日もかも 暇をなみと 里に出でざらむ

に対して「右の一首、右大臣伝へて云はく、故豊嶋采女が歌なり」

―故豊嶋の采女と書いてありますから、豊嶋采女は亡くなったんですね。

故豊嶋采女は、大宮人は暇がないので、きょうも里に出でこないのかなあと言う。大宮人は、宮中に仕える役人のことです。役人たちが忙しいから里に出でこない、この大宮人は采女の意中にある男性。あの人忙しいから、今日も会ってくれないのかなという歌でしょう。何となく現代的な歌です。次の歌

橘の 本に道踏む 八ちまたに 物をそ思ふ 人に知らえず

「右の一首、右大弁高橋安麻呂卿語りて云はく、故豊嶋采女が作なり」

―八月二十日の宴会で、豊嶋采女という亡くなった女性の歌が、二首続けて披露されています。二首目の歌はおそらく、一首目の歌が披露された後で、同じ人の歌、僕知ってる、なんていう感じで詠った。今で言うところ、カラオケで昔の歌を歌ってるような、奥村チヨの歌を誰かが歌ったから、今度は私も奥村チヨの歌を歌うわ、という感じでしょうか。三首目の歌が、あの人忙しいので今日も会えないのかしら、四首目は、私は独りもの思いをしているのにあの人はずっともわかつてくれない、というから、歌の内容も近いです。

この二首の歌は、なかなか報われない恋愛に見えませんか。会いたいのには会えない、あの人忙しい、忙しいばかり言ってる、だからひとりでももの思いにふけているのという、不幸な恋をした女性のようです。想像すれば、その恋愛をついに成就しないまま亡くなってしまった、とい

うことかもしれない。

『続日本紀』 采女の雇用条件

5頁目の最初に「参考 采女の貢進」とあります。

「其れ采女を貢るは、郡の少領以上の姉妹また女の、形容端正なる者を以ちてせよ。」

―郡の少領は、郡司、郡役人。その郡の役人の姉妹とか娘、美しい人でなければいけない。何をもって形容端正とするかはわからないですが、そしてその前の規定で、

「凡そ諸氏は、氏別に女を貢れ。皆、年卅以下十三以上を限れ」

―この年齢は采女にも及び、十三歳以上、三十歳以下で、郡の役人の娘・姉妹で美しい女性。これが采女になります。

B、Cの記述。男性の下級役人が兵衛で、女性の下級役人が采女です。当初は、郡からどちらかを献上したら良いことになっていました。男性の役人を出すところは、女性を出さない、女性を出したら男性は出さない。そんなにたくさん要らない。ですがやがて女性は数の確保が必要だということ、全ての郡から采女を献上するという命令に切りかわりました。

豊嶋の采女が出てくるのは天平十年で、全ての郡からと切り替わるのが天平十四年。ですから、前の規程の状況で豊嶋の采女はいた。問題はどこの人か。摂津の国の豊嶋、豊中池田のところ。または武蔵の国に豊島があります。どちらかがこの采女の出身地です。采女は郡を単位に献上されますから、古代の郡で、この文字で表すのは武蔵の国の豊島か、摂津の国の豊嶋か、どちらかです。どちらかと言えば、武蔵の国の豊島は、万葉集の東歌あずまに出てくらないで、ほとんど文献に出てきませんから、摂津

である可能性が大きいと言えます。

『上宮聖徳法王帝説』に見る豊嶋

次に引いたのは、『上宮聖徳法王帝説』 聖徳太子の伝記です。

「尾治王の女子、位奈部橘王を娶りて生める児、白髪部王、次に手嶋女王」

—この手嶋女王は、豊嶋郡に由来する名前と見られます。母親は位奈部橘王という、猪名川流域の位奈部の橘の王という方で、この手嶋は摂津の国の豊嶋と理解されます。次の『続日本紀』の引用も含め、豊嶋という摂津の国の郡は、しばしば古代の文献に出てきます。

豊嶋郡の秦上、秦下は、渡来系秦氏の一大拠点でした。池田の駅前に呉服神社というのがあり、呉服織、穴織の伝承をします。もともとは西宮から川が上がって、池田に定住した。そういう渡来系氏族の拠点でしたし、市域には茶白山古墳など大きな古墳が点在する地域ですから、蓋然性として、先ほどの豊嶋の采女は豊嶋郡の采女であると考えて問題はなからうかと思われまます。

采女は水司、膳司というところに配属されました。モヒトリノツカサ、水の司と書きます。カシワデノツカサは膳の司と書きます。どちらも天皇の飲料水、食事を管理する役所ですから、天皇のそばで奉仕をします。天皇の側近に奉仕する女官、実はそれ以外のところに配属される采女も少なくなかったのですが、原則は天皇側近の二つの役所に勤務する立場です。

『万葉集』に見る采女の自由恋愛の禁止

6頁A「内大臣藤原卿、采女の安見児を娶く時に作る歌」。内大臣藤

原卿は藤原鎌足のことです。鎌足が、安見児という采女と結婚したときに歌をつくった。

Bは、吉備津采女が亡くなったときに柿本朝臣人麻呂が歌を詠んだ。

Cは、安貴王という皇族が、因幡の八上采女を娶って、不敬罪に定められ本郷に退却させられている。

Dは、前の采女という人が、非常に風流な女性だったという。

このように、『万葉集』には、采女が散見します。采女は天皇の側近にはべる女官であるということ、どうやら自由な恋愛結婚は禁じられていたようです。Cの安貴王が八上采女を妻にした途端に罪人になっていること、あるいはBの、人麻呂の吉備津の采女の歌は

しきたへの 手枕まきて 剣大刀 身に副へ寝けむ 若草の その夫の子は

と、夫がいたことがわかれるのですが、夫がいたことと死が結びついてうたわれます。

『日本書紀』に見る采女の罰則

Aの『日本書紀』の記述は、采女と通じたことで罪を与えられるという記事です。采女とは自由恋愛、結婚が禁じられていたというのが古代の実態であったようです。

ウの資料も大原采女という人が流人になっていて、どうやら男性と通じたことが原因で流罪になったようです。

采女の恋愛と死、人々の噂

六頁の太い枠の中にまとめを書きました。

あの人は今日も忙しくて会えないのかしらと詠った采女は、摂津の国

の豊嶋郡から采女として都に赴いた女性。その采女が「もしきの大宮人」 官人と恋愛関係に陥った。けれども二人はなかなか会うことができませぬ。采女は自由恋愛を禁じられていますから、人目を忍ぶ恋、天皇の目を恐れる恋愛を一定期間続けていたのでしょうか。恋愛をタブーとする、その采女という身分ゆえに恋は成就することなく不幸にして亡くなってしまったというのが、あの二首の歌だったのだろう、と見る事ができます。

八月二十日の宴会でそのような歌が披露されるというのは、当時の話題だったでしょう。豊嶋郡出身の美しい女官が悲しい恋をして、その結果亡くなってしまった。自殺というようなことであれば、その噂はいっそう尾ひれがついて広まっただろうと想像したりするわけです。

『万葉集』 悲恋の歌と猪名川

七頁に猪名川の悲劇を挙げています。

かくのみにありけるものを 猪名川の 奥を深めて 我が思へりける
『万葉集』 卷一六にある悲恋物語です。夫が遠い国へ旅をして、残された妻は悲しみにくれている。夫が単身赴任から帰ると、妻はやつれて死の床に伏せているという悲しいドラマですが、その歌の中に猪名川が出てきます。猪名川が男性の任地であったこと、猪名川が沖の深い川として知られていることから詠われたのだと思います。講演の終了時間が迫ってきました。歌の解釈や、なぜ猪名川が読まれるかについて詳しくは、資料七頁以降をご覧ください。

池田駅前の万葉歌碑

九頁の写真は万葉歌碑。阪急池田の駅前にこの歌を刻んだ碑が立って

ます。奥に見えている商店が駅の一階部分のお店なので、これを手がかりにこの歌碑をどうぞ探してみてください。写真を手がかりに、お時間のあるときに探していただけたらと思います。

本日は、九十分おつき合いいただき、ありがとうございました。